

巻頭エッセイ

しなやかに、美しく国土を護る



佐藤孝夫
広島県空港港湾局長

2004年の世相は「災」で表現された自然災害の多い年でした。台風が10個も上陸し、猛暑は続き、梅雨前線による豪雨で河川は氾濫し、紀伊半島沖地震で津波が押し寄せ、浅間山が噴火し、新潟県中越地域で震度7の大地震が発生し…。もうないだろうと思ったら、スマトラ沖で大地震が発生。巨大津波がインド洋沿岸各国の都市を広範囲に呑み込み、15万人以上の死者を出して海岸地形まで激変させてしまいました。自然の猛威に驚嘆した1年でした。被災地の皆様方に対して心よりお見舞い申し上げます。

過激派によるテロも怖いのですが、自然災害も、いつ、どこで、何が我が身に降りかかるか予知できない点では、同じように不安な気持ちにさせられます。しかし、人類が争うことなく平和に明るく暮らすようになることを願っての自然からの厳しい忠告だと考え、常日頃の言行や自然に接する態度を謙虚に自省するよう心がけたいものです。

とはいえ、自然災害により、平安な生活環境と尊い命を、突然前触れもなく失うことに対する不安は消えません。可能な限り少なくするよう、事前に対応していくことが防災事業に従事する者の使命です。「既往最大の」、「観測史上初めての」、「これまでに経験のない」といった表現が多かった昨年の自然災害の前でも、地域社会に及ぼす被害を最小限に留め、減災することは可能です。そのための予知技術であり、土木技術ではないでしょうか。

広島県でも台風16号、18号の直撃を受けて、世界遺産の厳島神社も含めて県内各地で多大な被害が発生しました。普段は静穏で、美しい多島美を誇る瀬戸内海の様相が一変。地域住民の生活を守る最後の盾になるはずの護岸が高波で崩壊し、異常潮位により越流した海水が怒濤のごとく押し寄せ、背後の家屋を破壊。臨海部の産業基盤も被害を受けました。この10年間で台風による高波で繰り返し同じ被害を受けている箇所では、「前に被害を受けた時に要望した消波ブロックを設置さえしてくれれば、また被害を受けなくて済んだのに」という被災者の怨嗟の声とともに行政に対し不信感を持たれてしまいました。

「災害復旧は被災構造物の原型復旧が基本」に固

執するあまり、被災者側の観点に立った柔軟な対応に欠くことなかりしかと反省しきりです。設計基準の気象海象条件はあくまで過去のデータに基づくもので、過去最高の潮位、観測史上最大の風と高波、これが満潮時に重なることまで想定できなかったにしても、そのような自然現象の前でも「何とか護ってくれるだろう」との住民の期待に対して、「天災」の一声で開き直ってはいけません。想定以上の外力を受けるとあっけなく崩壊する護岸では地域社会の信頼は得られません。護岸前面に消波ブロックを何層も積み上げれば、ある程度の即効性は期待できますが、普段は静穏で、美しい山と島々に囲まれた瀬戸内海の自然景観の前では如何にも無粋です。海辺との触れ合いという面でもマイナスです。

台風災害の都度、被災メカニズムを検証し、海岸保全施設の構造形式を改善する努力をしてきてはいるものの、まだ何か不足してはいないでしょうか。直立護岸だけで防護するのではなく面的に構造物を配置する防護方式も段々と浸透してきました。これは、仮に壊れても瞬時に被害を及ぼすことなく、複数の施設が絡み合いながら、粘り強く持ち堪え、背後住民が安全に避難する余裕を与える、いわゆる殿軍の働きを発揮するものです。海辺の景観や利用にも配慮した、自然の一部に溶け込む防災施設をとの願いを込めたもので、更なる展開を願っています。

長い年月にわたる激浪の洗礼を受けてなお現在まで無事に残り、地域の安全を護り続けている防波堤や海岸構造物を見ると、そこには往年の技術者の思いとしなやかな発想に基づく職人的な工夫が感じられません。最低限の防護機能を持った海岸構造物を早く大量に建設することを期待された時代には、規格を統一するための設計施工基準に従うことが大きな意味を持っていましたが、その過程で、技術者としての創意工夫の発揮や、再度の災害を減ずるための仕掛けを積極的に講ずる姿勢を疎かにしてはなかったでしょうか。背後住民の安心する笑顔を思い浮かべながら、地域の特性に応じた技術と工夫を施し、しなやかに、そして美しく国土を護り続けていきたいものです。